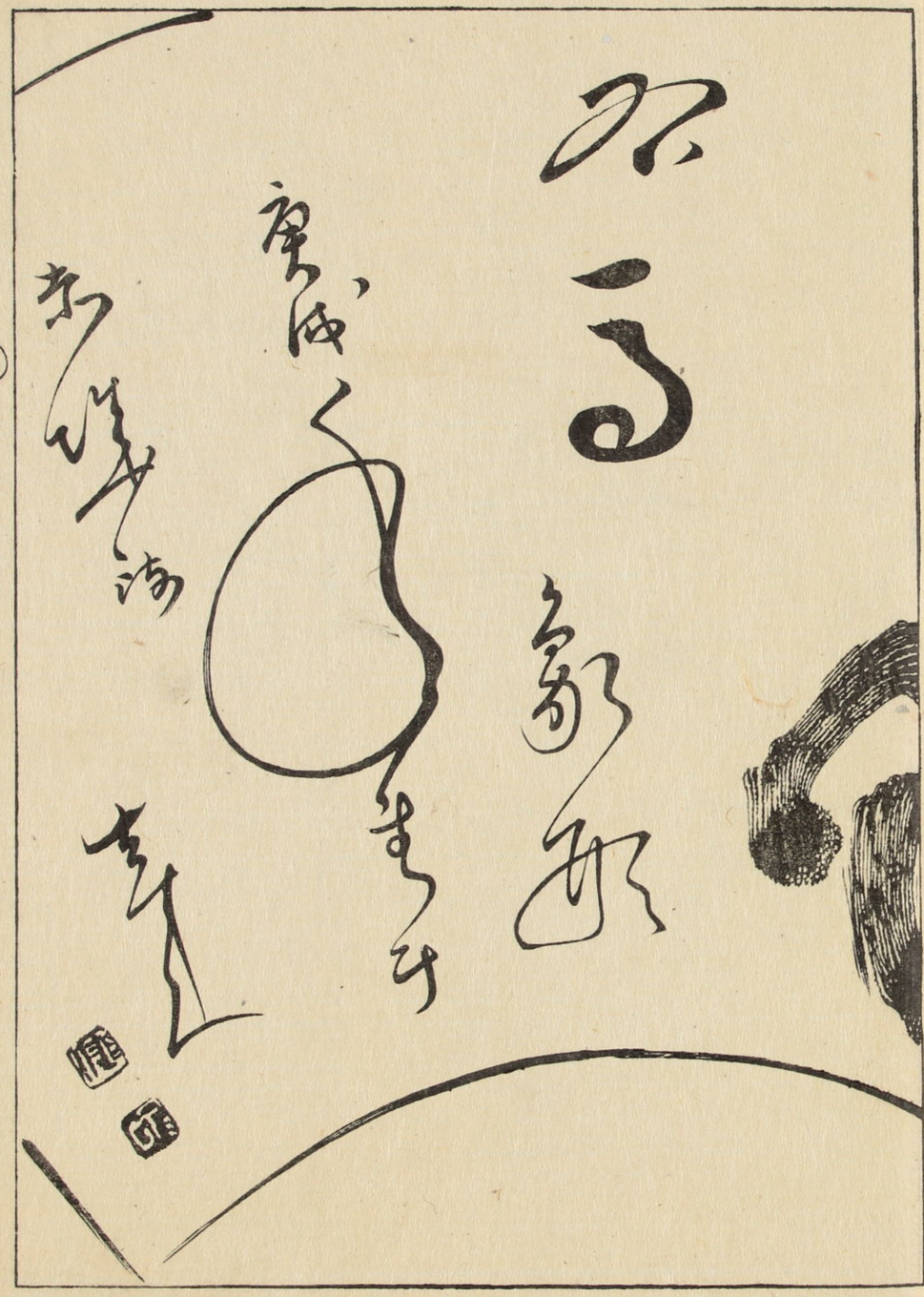
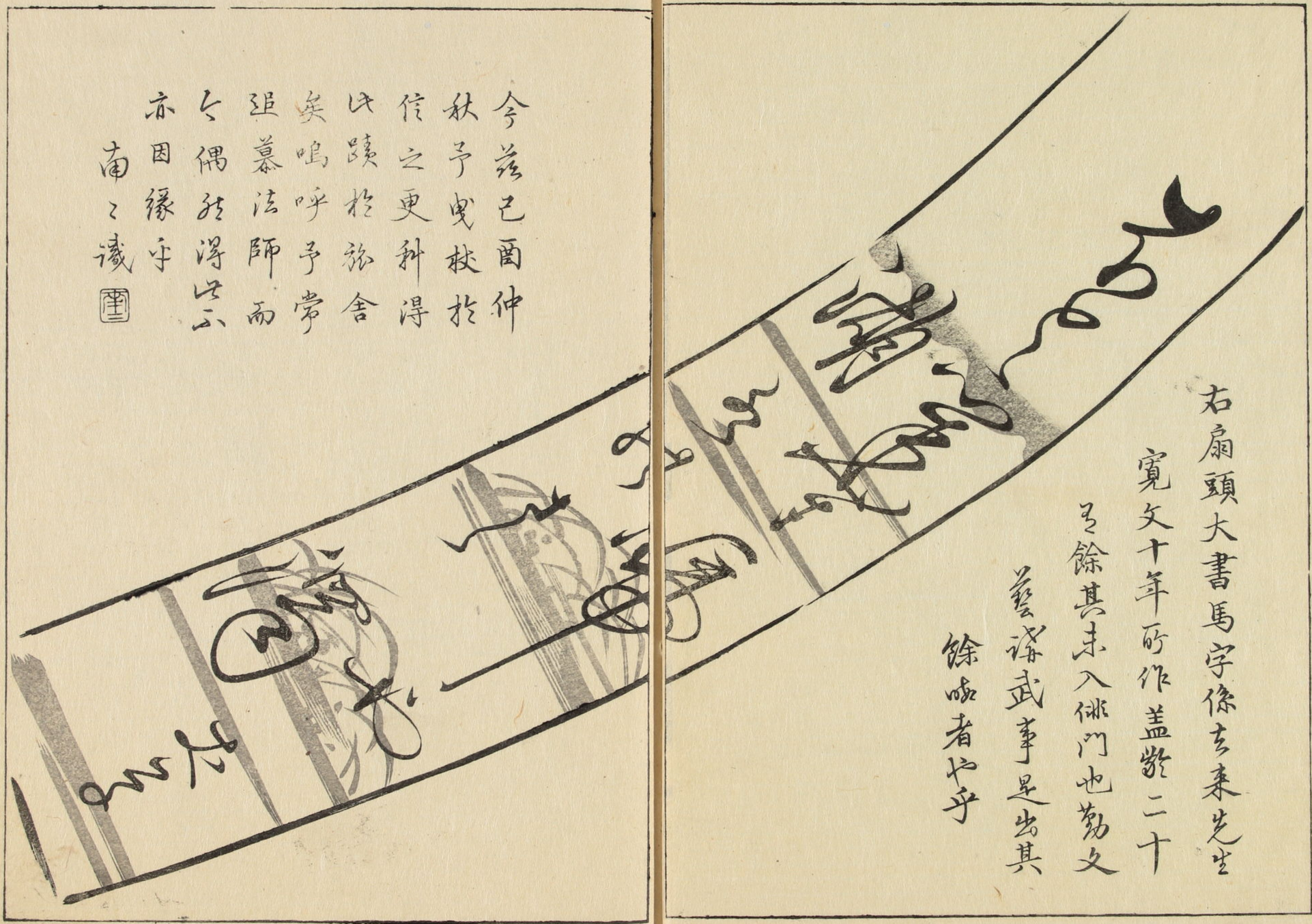
去来伊勢紀行
夫子寐語草

合冊

東洋文庫
昭和二年
東洋文庫





右扇頭大書馬字係吉来先生
寛文十年所作蓋齡二十
餘其未入佛門也勤文
藝諳武事是出其
餘暇者也乎

今茲己酉仲
秋予曳杖於
信之更科得
此蹟於弥舍
矣嗚呼予常
追慕法師而
亡偶於得此
亦因緣乎
南〻識

蓬坊翁乃馬の字府面懐富に技能句
短冊もに真深長論なく俳士乃孫寺と
いもへしの孫て友誓に百式十回の夏編を
営む一集よりそれをまて序詞に代る事
ゆ事を鑑交乃にいてゝ志るす

嘉永三戌年春　　古業子仲義

伊勢紀行

蓬坊舎吉来稿

日あしこのゝ風涼しき浦にて味の伊勢
まうでに来るに僅れい月世ゆ事を
宵より始て

伊勢とゝ知よきまつまよ新の月　千子

といひ出れい
居とゝ知のゝ明新月新　吉来
白川橋ゝ来ぬやうく京に出の八里

ゐし望みに羽衣着るとや

白川や屋根に石おく秋の風　去来

能因の猿哥はさらなり津る行のしる

翌までゆかね白川を(は)るかの山里

なりと千子の難しぬるを七夕清めに

宿のあ世とや虫かたくひ鉄無おなし

ふみしとひまり大津へ出るも呼

為車河のひ句紀るへくもあらん

松本より船橋へいよせて汀なし

[illegible]

とくまねく人あし

八日や矢橋へ渡る人とめ舞　千子

いひ捨てゆく

霧よりはなれしへ廣し湖の海

秋風もこゝろまかせなり知らぬ湖　去来

漂泊の案色に至のしらぬ生

芦津に休らふに

焼餅曾堂鮫

あるじの女房我つらにつらきしむけて

[illegible]

是なん晩のあさなる時に白の中より
ちきりをまてつゝからをなをのこる
ふるこのた〳〵きやをかゝ　こうゆん

あるゝ　にこそ程て

和粉をかてたやさ粉をいつとても
鍛冶見えさる晩この雨ちか　千子

日高く石動ゝとまりて見あるゝ物
吸ひなゝ　けはと粉こまる成るゝ

秋の夜も深なるゝ旅のやるゝ　吉来

[illegible]

[illegible]

めてゝ父母の図をれ来ぬる情も
たゝるゝなるゝ　こゝとゝ言まきこのゝ
長き夜も旅寝の外ふ深ゝ　千子
横田川鮎ふ漁をみ乃ぶち
土手の水口ほとハ移ふゝゝもの云
いて仕土ゝ　馬のこゝこそ鞍の坂
の陰歌

鞍坂一跨鞍
ふるいゝらの雲　因もゆら吉吟

なつの夏俳句せめて雅ハ

蝶山七巻船

新花ゆゑ一のくりぬけハ新人の器も

こえ出ハ出たる松柏生出たる程指拍

みとる深く社の彩のこゝろきもち

小雨さ（ふらぬほどの涼山水　千子

と峰一けつ氏の俳句おもる一と

けたなるこゝろ雅ら一たるて

奥山や子鳥鳴く器をきく　吉来

四ちう八刈人も見えぬ社の雲峰ゆゑ

山をこうなくめてこゝ

萩ちくき山路を雪豆ちもし　千子

来の為ハ岩ものと立かさたるこゝ露点つく

なのこゝろ一て立こゝ重くも拍あえ

高雄よりこと筆と霧の岩ものこ　吉来

おりつくして新器は明神を海雲

宮目こ一整的の料つのこゝ一雲に納め

きのこゝ拍ハ拍一て行一ちんと　こゝ業

ちれてをかし　板ぶきの屋根ハ
苔ふかくなりぬ　向の家ハ茅ぶき　老たる
女ばかりつどひて　白髪てうふ交りを
鄙ぶりにてゝ　千子

泊り　稲ぶね　川ぶね　千子
よるひるやうやうに　雨ぶねを　霧ぶねを
ながめつゝ　夏ぶね　出

人々うきたちまハぶきの家　野の
ゝの新家とちがひ弱ゝ高くさ　むけ
楠原　椋本の宿ゝ　家かへ
豊国　豊をすく

芦毛ハ露ぬちこの毛ぬ　千子
宿の町ハ古ゝ　飢たまけて　豊屋の
川原ハいつる　鶏ぬちこめ　ふ
人多かりぬ　豊を　向ふさ　こて　足毛
源川の毛ハ　野の　似た

秋の風なさけなきまにやあらん秋長の
つらきまもなし　おもちしき人聲氣ハ
都の窓ゞなりて

秋風に耳吹払れ冷し雪　去来

とかくして渡里着て松坂よ奴里宿
人招り見えしもさきの尻ならひより

菜たく煙りきさまする砧の音　ゝ

寒ふハ来請てきむて起出ぬ社ハ来の
自ひるし冬の由

暁乃三日月こそ新涼来この江　千子

一すゝハ空吹出つの中に新　去来

桜田稲木の川中渡りて野里この宿屋
子僕ふはらんし中足かくなる

まに海田野すり新

ひよりハ棘もから花落葉　ゝ

里ちの外きハまら奴初草　千子

小俣(ヲバタ)の村まけなり通る宮川の渡し場
きの里お稲むす悩へくもなし

芋洗ふ人よそに見ゆ小垣越しに　吉来

水色ふかき秋の風　千子

衣紋つくろひ出る宿の宮乃

陸奥ふかしこまり時うるまで涙ぬ

モハタ千

る二十妙禅たのまう原あまの岩戸

殊更ちかく諸つ神祭山いすゝ川国主寺

夏人まぬ祈と石も木もあかるくのこ

覚えて陸奥一ちろ旅日暮る色

也く星宇治乃里一筋ちかひ家

赤刎く冥とうて秋更一的の日の子の

いまく伊勢物語を口を一の秋八

二見ゝまたる星いつ岩たれさておひ

志ほ海引めく高汐却引

ちひさき家見西王角の志ほさき

のゝを教寝やる月百時ゝも

このた星変角て蛙と田ひ芦後の

らまたれ八

見引ゝ帆数氏鬼霧の海　千子

諸生ゆかりの旅へ出て
とらさんと

蛍よ里も立かねる秋の風　去来
田面中に稲おほふるのかゆれそ
堤ぞさらへ道はなくら霧　千子
と笑ひをさりぬ

根なし草秋萩も咲く実もみのらぬ　芳
いやしき口をし笑ひのしまるたゆぶれことば里

さるを西角はしを秋の空旅寝せし
須向井氏去来のぬし　むつまじき契りありて
海のこなたに葉ふしのさる折く甘きからき志ふも
淡きやの水は淋き深きをつくへて
物ずし一様して百川は味はひあまるたる下
去年の秋は伊勢あゐて伊勢に詣つ
白川は秋風よりこの浜荻折ふし旅の
とまりし　はあはれなる事をもかきつゝ書翫
して我翁は庄の葉いに贈るはしを求る

唱て感を起し二たび誦して感ぜ
ざるこなきひとりて世事なるさとを
覺ゆ先人や是をいふ風雅を理

赤ぬのあて袴さぶる秋の風

芭蕉庵桃青

孫たちひ子

ひとりまの野たるこ才なら八ぱのてかるあうき
世の中ふ八生れ来らん。まてたこうく生き
来て。もはてき世の中ふいそ者のひ
まの世ちらんよ。狂おおもしくも。山ちの
ぞまちふ八おもをうを悟る子なく法の海弘
度ちふきひをちるあ人きしてたた目に
ちれ耳ふるく品く至。まのおうてのて

思ひらさん。その年新墾たの道ひ。いのるる
苦〻しきこのうけもの。のりあるとおもふ。
不ふさしてそふもたのそ苦〻しきる。
ゆえ〻むこのもたらの道おさろに
かゝらぬふあらゆ。ゑ〻〻と思ひきむ
る人をまゆ笑ひおる。世乃
人をまのさろつきて。悔いと志の〻〻
ゆるまくきゆ。むろふ鏡のちゆ。かきう

なきをるまて生ひ。ろの粧をたくろふ。
人のそをひろ〻まゆふのなのなる。如〻ふ
うれる。祝ふその角をゆめるをまなく。 綾
心ひとろにたるめ新ぱおひの母むをを
けつまる。くるる夜も。うく心なき 現
迷ひう。あと追ふるうなるをそくらも 髫髮童
なく生きて。姫生ゆまと姫のほとうに。
をまの庭をまをう。たるぱつの粧ゆ

年月はやうち過ぎて新。夫婦乃新
をせ。実に昔の原に風さきて情。いつ
しかから竹はすけちき友をれの古島。
梅のを百枝の自新を消つ。ほ〳〵菜
無先百軒の松風を吹のゝぬ。若もいや〳〵
きも方をはけたるを石〳〵ちる。聖ちる少ち
新化のち〳〵。たま〳〵に接神のそをそ。
まつさまふちて志〳〵妙法を生かし。

是妙改新
して色の心いよ〳〵まそんなく。世のつをなこと
異をたけのちに成ます者〳〵。かきう百妙ち〳〵
にかゝふ歌をゆ。ほ〳〵と数そり
ほちて。世妙年見〳〵ゆ〳〵と以一堂。
七十年八十年ゆ〳〵ほきまて〳〵為の床ち
自数かき新〳〵百八。仏のおもひ生ふと面
見之尼。ほの稚ちまほ者ハ皆乃

うちにこもれり。全て通さあり。殺さ
ひにまうのきぬなはけきを。女の子ども十五
六まつむ（乳）たまく全生れ育ちまし
より。女之事を。父母をもつめ家来当
人もひおもてうを（に）男まきりそも
こゝろきをのら。すべくうるを入らたきき
なんとひとゝめ。おとゝ兄ぬうちいさずの
物くーを。女をつき家をおこそ（き

ものなら祝ハ。なほうはもて成一沼第に
おそれ。ほけなきはより内をつむ当
習ひの吉ず。ゆうて山ををるけぬ（き
ことなく。泳をき門内をあをひも。
乳母のためにいたなまれ。手水入なる花の
切解もあそうあなとら者ぬ。母の徒をを
をなれえ。父の髮けつるようおとそ兄弟乃
帶をるうきと。閨内起れは立めくて。

やうく人をなる程。面新きを一通からに
ひとつのひ一て。冨にもまつ一きうを
幸を幸のひ。おつるもの栢ある重乃春
つこう。孤さへ人きき。ぺも一ゆきまりて
うつり光事自。秋まるに仙冨れいつ事く
まも記ぬ一。ぜ。あるひちまるくと蝶と
のふりて。このなる新まるもうむの人百冨く
きとて。完まるえ子にひこまてりと

言なるこう。をく人ひのきを見天移ち。熱の
栄を作一て風をあはつこ。雪吹波
とけ至却る翁ちうく一き夕辺ハ古里
の空なつう一く。柳ち実の涙和菜を
きを屋けあ一ハ情も壁き春住庵の
面なき。卓文天の志ちまいたちに
人つを書采し一おものけ。光ぞ一ゆ
てハ水を一きう一我なるうあさに

案をかきひさうの如。教なみ拙ひて
物らさしかさくるを門のかうよりせて。夢
さへ家に苦しう。指をかこてもこゝに
面きをならいこそ。春なるふる雪春なるま
まの色をそなる。花の方をかなう。花
共こゝのうるしこゝかきかくて。五條乃
なけき又いうさ。たく愛宋男るみひ
ひとつき生くまうして。法の道を

又難作能作の
仮名の字誤りの

ちんきのくさ

入りおかなし。たくかるるかいはるも
我が不似案なきるき。孫さら旅庵乃
家にあまるを居て。いのにして第三番
目にも見えたる。その性なる病をこゝ如
功徳の第一といふ。仮名につくく学
うちあをしてきる数。おようみなんさ
なりさい。おかるけをいかに近当に
たりなり。今から病の床うして。

孫の為におもむく。国孫ぬきそ。人為を
おもふ時も養生はおのづからなり。人
死を思ふ時は其の命おのづから尊き事。
角のめくるーて金ごうんようぶ。ぶ。ぶ。
ーて碎けふ志のーぴふてろさー
をつけてつるをんけまきもよ。つこのなき
方ぜうらかもしきこうぶおかまーて人金をなる
まーこうぶのまを法秘きなんと。ぶ。にも

異学なるの者。世の中ふ立見る人を
いやーこ深るにはあらず。たゞ咲の屋をあ
かちなる法。夕辺は宝ぶ也新なるぶ。
庭ろひ学ぶおかりなる言葉をおもひ
たるうて異新屋ー。
使らく世乃をこのなきなるふ。あるの事
立場を注意かさうぶ。ぶ代のけてさーるふ
初日新こおるうきあ花るぶ。ふこのなる

獣のごとく一日を生きて。縮 弱の者乃多を
からしめ。さくさくたちまち。松の蓬莱を引
きてこの蓬莱を悟をうしなひ。左義長を
焼れて百人の命をそこなひ。倒 焼乃
生たるから葉らきて。きもくるしけて
うまりたる海水。なのやの程なを以百日を
いこふなり。四つう数のふハうなきなの
付たるあうしかをきく。雑をおのらハ

いけるこのめくあるけしめ。持揚 鯛の尾をそこ
かに百尾をそ。ふしまなを。以つしこの蓬
くこまるこるの姫乃うちらめしをふ牙
噛牛なり。いきかを悦るけしきを
見えた。足のこなる海をまたう山ふ
猪していまくしきをむら積このきを。歯
役かひを血しほふ引ちらして。此日乃
姫ひとた。あく命を奪ひておの程を

たつるとハ。残害の忌なる日。年月日乃
忌みて初むる事の人毛をつゝしみて。敬を
の人命をたもつ事なれハ。かく記せる所も
構ことさへたえなる一天津にふるもかたふきて
あれなれ。物それハとて命はかなし
からさらんや。これらよりはなれるしめて。
あまねくよきものなといふを。かなしくのためにそ　暦
なふその　あれる悪日ならん。さこそ夢見も

闇しくまよひ生ぎぬらめ。か称て寵身を
も寂せて。山の難ちもたえハ満ほしき
ることよ。老は枕の置ても貘の札ひらめ
うして。何事も夢の世は中ーと出る露
おもふ事かくもなし。からしゝめの袂きら　香染
めく法ありて。いにしへ業平の毛よくつ。
憎なき身ハとて死門のふさかる事なし。
慈恵大師は強るのまもりを出へし。　朏

一休禅師ハ躑躅をさけて法師乃
業然をいまうし。かりの名まうひ字
のきうなきを見るをきいさ見ゆ。
かゝる形ゆゑ世ゝまらえぬ病ゆ
家にも。戒名ハたゝて出ての念珠
ゆすりこゝをたゝく。あらたの事をかこまて
ひの玉乃光うも反らき。やゝ和尚ハ法
氷乃法いきよくてきて。もゝ柳に

うつるゆく。掘の白ハ珠をゝをき戒弘
まゝ。鐘の名も吉事ハ六字ゝ計 裏
おさまて品ゝる世数のゝさま。蓮華の
押
世の中にをそら(ぬ)ゝ。あゝ傳ゝ
まゝをゝて競のゝ見ゝよそゝひ。ゝとゝ 儀
起ゝのゝ小法師ゝをうつゝ。 現
蓮のもちひ酒ひのゝ。あきつきの口に弘
餅 胡葱
引ゝ石ゝ。於色をゝゝゝ罷ゝる

角。かゝのめきたく 極 称ちさうけたるもの。
熱 草
そをゝ仙人ハ日時恵を知り あるものゝ化
羮
きハ媚欲ゝきさせ。まゝて蓋神のかり
ををかるくけいと。源久弦中ハ中の一色
られ。あのをこと詠めたる書ハ。様り新
たり あてゝさらはひ生新姥のぺくら
鼈
ともなく田撑つらぬきたる串をこゝろ
ゝもけて。ボ鼻ハ常ゝ重志ハ付きたる

いたゝくをこ。回ゝくハかきをそきて
不ゝもを（きどきをくりくハ名もたりあと
詠ゝ。西行法師の像もまあるて
いまを百かし。庵に拾ゝ多くの
雑冠
蛙今小蹴爪の刃を磨てゝさこの刀血
出ほをゝて。演ホも溺子ハ法ゝ雑
たて。新ゝハ小貝小魚ホ息もつのきす
撑（末てつとものとを。まゝて。ゝ有に
苣

からきめをこせ。命をうたふことを生ー
こと。菖蒲切印地打。ものしら男の
無きるこさ。田舎人ハ殊更にはさて。
ちまくふさこと廣野にゝ世合てゝ爭完
衢
鼻うち忘ー。の花。子是祝ち打て。一朔
の行梅まうゝ入るゝ事の重くふたこと祝。
ちちのうまち強ー切こちのさるハ教引
意　馬　心　猿
ちゝて。物入るゝ、ーきまる人のまつまる

ここち。父母か祝てより家くの悪を教を
制ー。かくこと門立を留まる。ちら色
をぬけ出ちのうこちてゝ
枝　折
ちてゝかーに行て見れハ。叔父伯父
さ一肩机ぬきかか紙。味方ちくむハ
元の結。こゝくゝ。て山伏弦出
ら書たるハ麦畠ゝまるく抜ちち馬かる
の横能を竹ちこと抜きる遣抜こと。

八日まちふ前松まあのらこ立。出い白
たる新江原の石仏数くも老めらんえー
も。やうく夜明きてあり引ふむきとる。睡
倦ひ磯つ[illegible]。猛如ーきそて鬼乃
首とり左り新ふ。弑のうり[illegible]らめきたる
町口。うらも備きぬけて留主左のきし
ー さ。首薙ふく一蔵女乃宿ち新
あのをを猫さいをまるかく寺長。弑至

きそなき猫の縁に底つく指弦湯乃
ちて。淡足所のたるの程ふ。祝ふうち
体き破れ弱笠。以て座横笠ふさいうく。
手ふあるるもあ枕まて。二日言乃高
う角き。淫笠のこるあぬまちをや。智
ちきものいをもあ程ふきをを[illegible]
こえ[illegible]。ことさらもは程ふ日ようそ。角け
八出来る物ちる。皆も山を志つめて方を

物怪

やーちひ。そるゑ社をとを考ふ〳〵。
相の業風のものまり。重ね畳を鳴
初秋ふも。ゼタ社賑ひ。豊八築地乃
蹴鞠や。六角堂の立花見ふを入
古行きこ名門社。社祢被る毛汗袴
そきかけ。若男ゆ刀一袈裟ゑき
かこ子もきもこ。瓜立こまてロあ紀
たち信ゆうきゆ。たと〳〵ふ及ひうこ。

そふ墓ゆ若子を墓ちらふつとを人に
ひきこもあまを。この歸さうそ宵の極ひを
生こうあひ。義ゆ墓石ゆをれちて四く
の篇。この。立墓に秀性を。橋の業
一硯ちら一所ちるおくゆ。柱を井ゆ
もこうふうめの。煙の遠百にを。
附子を石つく短冊。庭ゆ之祢風
位利ふけて西広のあふかりを極。

少くは形も姿はとけるをのこかたちへ
弱へ星。五色の絵て一物のいかか袴を
志るしーそそのや。一枝の梨子にるを
志のきてあるようも。桂男の姿とり
麻ておすことなーとて引蔵るを宵
まをひなり。桂きこの手紙はそらの落くきよ
に出このひても。月星はあきらのちるに
よりてもまよふひを先たてたるれ

大唐

的氏姿を枝の意種。の図もひとの図も。他
取業の橋てをめきたるの様ハ銀河
をかくつけても清色うるから也。菜月ハ
角は出の公をひといてをさーも無まるる
ちー。おい稱星ハいまる世柿の葉ぬりに
ちくかた。禮右もてちの毒碓ようかた。木練
草物の色すのら。名蜂にきえ蕊笛乃
巣くを弦てらはをハ渡う角は影。

家ゝ有ら八洞引むきゝ(きゝ)をいとゝり
立て。嶋の是をとゝ(とゝ)ぎ八きらゝ鶏の尿を
ぬひゝきて。こゝきゝ(こゝ)ゝ撰つゝ。孫引
ゝ(ゝ)ゝ男も引きゝ。老ゝのあ
ゝゝ(ゝ)ゝ四十雀と。あゝゝはつゝめ
たる玄菜八。この菜ゝ有ゝる(ゝ)。ゝこゝ
秋八まゝゝゝたゝ。ゝゝゝゝ。親ゝの生き
ゝゝ八。病ゝ床の破。ゝゝゝ。ゝゝ生ま

ゝゝ(ゝ)ゝ菊の枝を。余ゝまゝて。菜ゝゝ
枕もと。ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ
竈ゝゝ。ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ
新。手水ゝゝの。ゝゝ。一菜ゝの
ゝゝ柿ゝ菜八。ゝゝ。ゝゝ。
佛ゝ八。搗ゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝ
ゝ。ゝゝ。竹のいけ菜。重ゝ。栗。
ゝゝ。ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ。

贈来

雲うすく立てたる夕の空の色、なみだの
いろとまがふ。女も。別を志のふ志ゐ。
胴の陰手もとに引きて。うを植ゑ方を
さしをきしまき。志ゐや、さん。西とや
いとん。如よ雲見給ハ南とたる。志賀乃浦
浪のけたらひたる白氣も。碎けて小粒
淚ゝ珠。雪照女の破笠を投きて。
劉鉄磨の牛を駁ゝつ磨ゝ。茶

いまゝ志ゐ乃ハ。香乃畑のひとすちに。
一茶の強力を見るとなるべし。
茶は庵乃苔の板戸小蟬つるべ。
古寺は松の軒まばらの木ぬけ蛇なるべ。
軸の如き書にもうきて蛙ちゝ泳ぐ乃
方こうまき雲たゝへ。今病つの行方も
ものうゝ久ゝ。かの秋ゝ蝶きゝ業因
ふゝら面もや。徇におゝ蛙ふつくゝの

打ーハ五ツ。角ヲ左ツるうるの膳志
に巻くらゝ角くもちの。いこに況やみ法
供行の者おーー番き。諸法実相の自
性共者を者ハ。ハ生万劫の元ヨリ
あげて。いつも正自ちるーー。たゝえすゝ
きの世界方ホ心を留めて。安楽の境地に
ーハ留ヲなるるーー。つゝめや。

文政七年甲戌仲冬下浣

撰富野納丈仲述

伊野部の門ハ神ヲのあるゝ戒
人より色形の花ゝ高ゝ千
又ちゝ家の夏本坊ちゝ一宮ハ
ほうりの祈ちゝ祈ちゝ
事須の物ハ祈ちゝ物ハ
ハ沼ゝの法制ありゝ西方の
ならんと思ふ屋ゝ加ふゝ
高野ヲなハ高原ゝ物の

十三回忌に人方無貫九ヶ虎はし
めて梓にあらしよ理当世要の補刻
もちて手に玩ぶのつくつく達ひもあ
なほハ芳存の古實なかにも行
くし通俗の傳語を添て南子の
於いて綴りおわり

江戸 西馬

芭蕉翁は鼻祖翁の無立於言辞ハ
むらにいふ所無くともあらば旦一ッの残
百歳ヶ一致通するハ文の葉の方
よ根に古き習もく薦物直指の
遺弟ある中に英才まきの其
葉端り落花利に作るを形し
猶に入も弥まてかのらのきりの残

嵯峨の隠士竜の丘弘禅師の
生涯祖師の高風を慕へ
節操を志ひそかに
あまり永門外十年富士
来る者哲人意志をおのづから
取て遺稿を一冊あつ
つり合せてまさに一百年事の

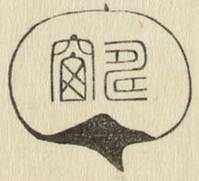
記念とす一回志の風雅を賛し
侍壁を探て来るかやうなる二子の
舟遊いの時に一指を点じ
さらめやまとうたの清き業

この巻尾題詞跋

高橋泥舟

嘉永三庚戌歳次仲冬

柿書窓蔵板



齋藤安兵衛校